

第七課 まり(鞠)あり(蟻)めり(夢)うめ(梅)

〔注意〕 發語の採録中よ掲げざる語と撰び代んと欲せば
宜しく左の數條に注意あるべし

一、音調の原語に似たるを先にして語意を後にす
一、五十連音に基きてか、さ、た、な、ひ、ま、や、ら、わ、を、お、に、代、へ、又
こ、そ、の、ほ、も、よ、ろ、を、を、れ、に、代、へ、な、ど、し、て、猶、能、く、語、を、な、す
もの

一、普く世間よ知れ渡りある語よして成るべく雅なるもの
の

一、吃者のいひ難き語よりは寧いひ易きもの

一、唇音、舌音、齒音、口蓋音等に就きて斟酌すべき事
此匡正法に就きて著者に通信せむとするものと男女、年
齡、強弱、吃の原因、吃る模様、兩親兄弟姉妹の健否存
没(若し病あり、若くは病没したるは、神經に關する病
なりしか、又吃なりしか)を東京神田區裏猿樂町耳科院
よ告げ越されたきものなり

◎蛇咬及ヒ昆虫ノ螫傷ニ就テ

醫學士 三輪 徳 寬 述

蛇毒ハ種々ノ蛇類ノ咬傷ニ由テ來ル者ニシテ熱帶地方ニ
於テ殊ニ多ク且危險ナルモノナリ而シテ其毒性ハ何種ヲ
問ハス皆同一ノモノニシテ其毒量ハ或人ニ由レハ〇、〇
三—〇、〇六五乃至〇、三ヲ有セリト云フ又他ノ實驗說ニ
由レハ蛇ノ饑渴時ニハ其毒量多シト又平素手慣レタル蛇
ハ山間ニ棲息スルモノヨリ其毒少ナシ其性質ハ白黃色ノ
流動物ニテ無害ナル「エビテル」ヲ有シ固有ノ微菌ヲ有セ
ズ空氣ニ暴露スルキハ稍粘稠トナリ之ヲ貯蓄シ若クハ乾
燥シ或ハ亞爾個保兒虞利斯林等ニ混スルモ其毒性ヲ減却
スルコトナシ動物ノ皮下若クハ靜脈中ニ之ヲ注射スルキハ
血尿血唾血便等ヲ發シ遂ニ痙攣ヲ起シ運動麻痺呼吸困難
等ヲ以テ死ス亦或人ハ此死因ヲ呼吸中樞ノ麻痺心臓麻痺
脊髓出血赤血球變化等ニ歸セリ而シテ其毒ノ本性ハ未ダ
不明ナル所ノ一種ノ「アルカロイド」ナリ毒ノ所在ハ人体
ノ耳下腺ト同一ノ構造ヲ有シ且同一ノ處ニアル毒腺中ニ

含有シ一條ノ排泄管ニヨリテ毒齒牙ヲ經テ外部ニ現ハル
而シテ有毒蛇ニ於テハ其腺ノ直後ニ一種ノ齒牙アリ無害
蛇ハ毒ナキ齒牙二列ヲ有ス故ニ咬傷ノ狀体ニ由リ毒ノ有
無ヲ知リ得ルヲアリ而シテ毒ノ劇易ハ咬傷ヲ蒙リシ部位
ニ由テ差異アリ皮膚ノ軟部若クハ其他ノ吸收容易ナル部
ニ於テハ毒ノ感受殊ニ劇甚ナリ又衣服ノ有無淋巴管吸收
ノ遲速等ニ由テモ差異アリ

本邦ニ於ケル毒蛇種々アルモ其主ナルモノハ蝮、飯匙倩、
海蛇魚ノ三種ナリ就中飯匙倩、海蛇魚ハ琉球及ヒ鹿児島
エラブサナギ
ノ大島ニ生活スルノミニシテ其他ニハ少ナシ故ニ通例我
邦ニ於テ毒蛇ト稱スルモノハ蝮トス之レ普通各所ニ住ス
レハナリ

(症狀) 全身症狀及ヒ局處症狀ナリ
屬處症狀ハ咬齒傷ト創口ノ溢血樣變色ノ他速ニ發スルモ
ノハ疼痛及腫起ニシテ次テ咬傷部紫色若クハ炎症性ニ潮
紅ス
全身症狀ハ青酸中毒ニ髣髴ス即チ身体不安眩暈幻覺呼吸

困難略痰(多クハ血液ヲ混ス)嘔吐(又能シ血液ヲ混ス)血
便血尿運動麻痺等ニシテ其他重症ニアリテハ言語及嚥下
作用ヲ失シ痙攣ヲ起シ最重症ハ虛脫次テ昏迷ニ陥リテ死
ス之レ諸他神經中樞ノ麻痺ノ結果トシテ現ハル、モノナ
リ

(診斷) 創傷ノ外見周圍ノ狀況其他急劇ニ發スル諸症狀ニ
ヨリ診斷ス

(預後) 創口ノ景況患者ノ營養毒ノ吸收如何ニヨリ差異ア
リ經過モ亦種々ニシテ僅カノ時間ヲ經テ治スルモノアリ
然ラサルモノアリカウフマン氏ノ說ニヨレハ受傷後二日
間生命ヲ保全スルモノハ最早預後善良ナリト云又蛇ノ種
類ニヨリ毒ノ多少アルヲ以テ從テ預後ニ輕重アリ其甚シ
キハ受創後數分時ニシテ死スルモノアリ獨國佛國ニ於テ
モ蝮ノ一種ノ咬傷ヲ受クルコト多シ獨國ビルロート氏ノ統
計ニヨレハ六十人中死亡二人佛國ニ於テハ十四人中六人
ナトリ云フ我邦ニ於テハ未ダ統計ナキヲ以テ不明ナレト
佛國ヨリハ死亡少ナキナラン

(療法)第一毒物ノ血行中ニ吸収セラル、ヲ防グヘシ此目的ニハ咬傷ヲ受ルキハ直ニ其上部ヲ緊縛シ血行及淋巴行ヲ杜絶スヘシ人口ヲ以テ吸出スルノ法ハ危險ナリ若シ粘膜ニ創口アルキハ直ニ吸収セラレ又仮令創口等ナキモ健康粘膜ヨリ吸収セラル、ニアリ其他人工蠟針等ノ存スルキハ咬傷部ニ瀉血ヲ施スベシ

第二創口内ノ毒分ヲ中和セシムベシ、之レ創口ヲ深ク開大シテ硝酸或ハ過滿儉酸加里結晶ヲ以テ腐蝕シ或ハ腐蝕安謨尼亞ニテ洗滌スベシカウフマン氏ハ五十%石炭酸水ヲ以テ腐蝕スルヲ賞用セリ烙鉄燒火箸卷煙草ノ点火セル者等ヲ以テ咬傷部ヲ燒灼スルモ可ナリ彼ノ獨逸地方ノ獵夫ハ能ク印度ノ法ヲ賞用ス即創口及其周圍ヲ濕潤シテ火藥ヲ其中ニ入レ火ヲ点スルナリ又其一部ヲ銳ヒニテ抓除スルモ可ナリ其他創内及其周圍ニ二十乃至五十倍ノ過滿儉酸加里液ヲ注射ス又安謨尼亞屈ト蒸餾水各十五滴ツ、混合セルモノヲ創圍ニ注射ス但シ此等分ノ者ハ注射後疼痛膿瘍等ヲ生スルヲアルヲ以テ尙稀釋スルヲ良シトス

而シテ注射ハ己ニ全身症ヲ發スル片ハ無効ナリ咬傷後二

十分時位マテノ間ニ於テ効ヲ収メ得ベシ

第三毒ノ体内吸収ニ對スル抵抗力ヲ強カテシムベシ、此目的ニハ即腐蝕安謨尼亞液二十滴ヲ粘滑物中ニ混シ一時間ニ一二回時トシテ三回ツ、内服セシム又亞爾個保兒ノ大量ヲ用ユ其他一般ノ清涼劑ヲ投ス往古ビロン氏ハ解毒藥トシテ臭剝沃剝昇汞等ヲ混シタルモノヲ與ヘシモ効ナシ

第四血行中ニ吸収セラレタル毒ヲ外部ニ排除スルヲ力ムベシ、即發汗劑利尿劑ナリ發劑ノ目的ニハ「ヤボランジ」煎ノ内服ヲ與フ過滿儉酸加里及ヒ腐蝕安謨尼亞水等ハ當今蛇咬傷ニ向テ特効藥トス

昆虫刺傷 昆虫ニモ種々アレ其主ナルモノハ蜂、蛇、土蜂、臭蟲、蠅、蟻、百足、シムシ、クモ、等ナリ然レモ多ク且劇シキハ蜂ナリトス

蜂ノ刺傷モ亦其有毒物ヲ整部ニ注入スルモノニシテ此毒ハ蟻酸ナリト云フモノアレ片未タ判然セズ

蜂螫ヲ受ルキハ直ニ白色ノ小刺傷点ヲ生シ其中ニ屢々針ノ折片ヲ有ス而テ螫創部ノ周圍暫時ニシテ赤色限畫性ニ腫脹スルヲ恰モ蕁麻疹ニ髣髴タリ次テ癢痒灼痛ヲ感シ水泡狀ヲ呈ス然レバ時間ヲ經レハ漸次疼痛腫脹ヲ減ス若シ所々ニ多シノ刺傷ヲ受ルキハ炎症劇シク從テ熱發等ヲ來スコアリ受創ハ手顔面頭部等ノ衣服ヲ被ラサル所ニ多シ而シテ一時炎症ヲ來スノミニシテ死スルコナシト雖若シ舌ヲ螫ルハキハ舌炎症性ノ浮腫ヲ起シ急ニ死スルコアリ又淋巴管若シハ血管中ニ直接ニ毒ノ入ルキハ數時間ニシテ死スルコアリ

(療法)創内ニ刺針殘留スルモノハ可成早ク除去シテ炎症ハ冷奄法ヲ行ヒ又油類ノ塗擦ヲ行フベシ「アンモニヤ」ヲ内服及ヒ局處ニ塗布シ舌并ニ口内ヲ刺傷セラル、ハ寒冷ノ含嗽藥ヲ與ヘ氷片ヲ嚥下セシメ亂刺ヲ行ヒ若シ非常ニ浮腫ノ窒息セントスル者ハ氣管切開術ヲ施スベシ臭虫(水中ニ生活スル虫ナリ)ノ刺傷ハ蜂ノ如ク腫脹セサレバ神經挫斷ノ如キ非常ノ劇痛ヲ起スコアリ

蛇咬及昆虫螫傷ニ就テハ古來俗間ノ治法或ハ漢醫ノ書スル所稍其肯綮ヲ得タルモノアルコトハ吾人ノ見聞スル所ナルガ今參考ノ爲メ茲ニ多紀安元氏ノ著セル廣惠濟急方中一二ヲ摘録スベシ

(蝮蛇咬傷)急ム柿漆を塗るべし若し無きときは乾柿の肉剉み醋よ煮て塗るべし又方急に烟管の雁頭(小き竹の切口にてもよき)を穿つむけに傷所へ掩覆力を極て搭定て放さず暫時すれば肉腫起て雁頭の内一杯になるものなり其所を小刀にて斷割て惡血を多く絞出すべし又は急に鳥銃の火藥を嚙みたる所の大き程に成置て火を點て火を發すべし右の方便宜に任せ用ゐたる后は人の熱き小便をちかけて瘡口と洗ひ其あとへ人の尿を傳てうへを布木綿にて卷き家に歸りて酒にて人尿を洗ひおどすべし云々

(蛇咬)常の蛇に咬たれたるハ鹽を嚙て傷所に敷き其上へ艾にて灸を二十一壯すべし訖て復鹽を嚙み傷の所へ塗るべし若し山野に鹽も艾もなきときは火繩の火にてても烟草の火にてても傷の所へ押付て熱きと堪ゆべし又方明礬火よ

て溶し咬たる所に流のくべし熱を忍れば立に瘡又烟管を火の上にて炙れば涎湧流るゝものなり其涎の流を直に傷所へ摘掛くべし其熱きと忍て多く灌うくべし此方蝮蛇咬にも用てよ

(蝮蛇) 痛痒忍々ふきは手にて搔けハ皮肉破てあしと搥を上に布て物に包み置べし即瘡也又整ふる時直に熱湯に洗ひ立ふ癒ゆ龍腦樟腦能く此毒を解く何よらず此物の入たる煉藥類又目藥様の物と塗るべし

(蜈蚣咬傷) にハ雞蛋を塗てよし黃白共に用ゆ又方毒甚く痛腫強きは人の糞を咬破りたる所に塗るべし又方塩を咬みたる所よ付て癒ゆ又方蜘蛛を取て咬みたる所よ置くときは蜘蛛自其毒を吮て痛立止

(蜂蟻螫傷) 食蓼の葉と揉て傷所に貼てよし齒涎を整ふる所に塗てよし又方生蜀椒を嚼て整たる所に封て妙なり生なきとき乾ふるもよし若し實なきときは葉にても用ゆ又方塩を嚼て塗るべし又方薄荷の葉を揉て封るべし按スルニ右所說中雁頭又小キ竹ノ切口ヲ蝮蛇咬傷部ニ押

アツルハ強ク其周圍ヲ壓迫スル爲ニ前項療法中ノ第一ニ論スル毒物ノ血行中ニ吸収セラルハテ防クナリ又火藥ヲ咬傷部ニ貼シテ點火スルハ獨逸地方民間ニ印度方トシテ能ク獵者ノ用ユルモノト同一ナルヲ以テ見レハ之レ恐クハ支那ヨリ傳ハリシモノナルヘシ然レハ彼ノ人尿ニテ洗

滌スルカ如キニ至リテハ甚タ取ラサル所ナリ若シ果シテ人尿ノ奏効アルモノトスレハ其中ニ含有スル安謨尼亞屈ノ中和力ヲ有スルニ他ナラザルベシ幸ニ之ヲ中和スルトナスモ人尿ハ各人ノ嫌惡スル所且素ヨリ不潔物ニシテ創面ノ治癒ヲ妨クルヤ必セリ又蛇咬部ニ灼艾シ或ハ烟草若クハ火繩ノ火ヲ以テ創部ニ付ケ熱ヲ堪ユルハ燒灼スルト同一ノ効ヲナスモノニテ療法中第二項ニ適合シ尤モ簡便ニシテ且良効ヲ奏スルモノナルベシ

各種ノ咬螫傷ニ食鹽ヲ用ユルハ古來西洋諸國ニ於テモ施ス所ノ良法ニシテ其効ハ毒物ヲ中和スルニ因ルト說クモノアルモ果シテ之ヲ中和スルヤ否ヤ將又腐蝕藥トシテ他ノ諸藥ニ勝ルノ効アルヤ否ヤ未タ確言シ難シ然レモ食鹽

ノ凡テノ咬整傷ニ向テ効アルハ事實ニシテ蜂螫蚤咬等ニ之ヲ用ヘ暫時ニシテ腫脹消散スルハ吾人ノ實驗セル所ナリ又大島地方ニ於テハ飯匙情咬傷後直ニ海水中ニ其創部ヲ浸漬スルハ効アリト云フ又余ガ友人某ハ嘗テ手ヲ蜈蚣ニ整傷セラレシニ該手ハ上膊ニ至ル迄劇カニ腫脹セシヲ以テ食鹽水中ニ浸漬セシニ漸次腫脹減退シテ暫時ヲ經テ全治セリト云フ蓋シ食鹽ハ水分ヲ攝取スルノ効強キモノナレハ整傷ノ爲メ淋巴管炎ヲ起シテ組織中ノ水分増加スル際食鹽ノ其水分ヲ奪去スルニ因ルモノナランカ又食鹽ハ利尿ノ効アルヲ以テ見レハ療法中第四ノ目的ニモ適應シ以テ体中ノ毒分ヲ体外ニ排泄スル効アリ故ニ食鹽ハ局處ニ用ユルノミナラス内服スルモ効ヲ得ベキモノナルベシ

以上述タル如ク食鹽ハ種々ノ整傷ニ効アルハ事實ナルモ他藥ニ比シテ尤モ確實ノ効アルヤ否ヤ不明ナリ蓋シ刺傷等ハ其療法ヲ施ス速ナルハ体中ニ毒分ノ吸收ヲ防クヲ以テ凡テ此際ニ於テハ迅速ヲ貴ブモノニシテ己ニ吸收後

ニアリテハ對症療法ニ過キサルモノナリ然リ而シテ食鹽ハ何レノ處ニモ之ヲ需メ得ルヲ以テ之ヲ外用シ又内服スルハ尤モ簡便ニシテ且佳ナリ又患部四肢ノ如キ縛シ得ル部ナルハ先ツ之ヲ縛シテ後上記ノ法ヲ施スヲ良シトス其他灼艾煙草燒火著等ヲ以テ燒灼シ或ハ小刀ノ瀉血等ハ急劇ノ場合ニ應用シ得ルモノナレハ之ヲ試ルヲ良シトス

◎「コロ、ホルム」麻醉中ニ發スル

心臟麻痺ヲ救フノ方法ニ就テ

醫學士 筒井八百珠

「コロ、ホルム」麻醉ヲ行フノ時ニ當ツテ吾人ノ最モ恐ルハ所ノモノハ窒息及ヒ心臟麻痺ナリトス而シテ此ノ心臟麻痺ヲ救フノ方法ニ至ツテハ一モ確實ナルモノナキガ如シヒユーター氏ノ電氣穿針法ヲ唱フルヤスタイネル氏之レニ和ス然レモヒユーター氏自カラ之レヲ試ムルコト二回共ニ其ノ功ヲ收ムルコト能ハズ今日世人ノ之レヲ顧ミルモノナキニ至レリ其他普通ノ人工呼吸法ノ如キ能ク窒息